

## 投稿論文

# 学士課程卒業後 1 年目保健師の語らいからみえた活動の実態

藤井 智子\* 杉山 さちよ\* 北村 久美子\*

### 【要 旨】

本研究の目的は、当大学学士課程を卒業し自治体に就職した1年目の保健師がどのような活動に取り組み、仕事上感じている困難さおよび対処方法等の実態を明らかにすることである。6人の新任保健師を対象にグループインタビューを実施し、質的帰納的に分析した。その結果、63のサブカテゴリー、17のカテゴリーが見出された。実践している主な事業は、【母子保健活動】【成人保健活動】【連携調整】【家庭訪問】、仕事に対して主に感じていることは【個別の支援が難しい】【事業企画が難しい】【業務への自信のなさ】【力量以上を期待され負担】【自分の考える保健師活動とのギャップ】、職場環境に抱いている気持ちは、【受け入れられていると感じる】【職場環境における教育体制に対するとまどい】、仕事で困った時の対応は【職場内で先輩や上司に相談する】【職場外に相談する】【自己研鑽】、仕事で感じる楽しさは、【住民とのかかわり】【保健師の技術や役割がみえた】【めざす保健師像がある】であった。1年目の保健師は、母子保健および成人保健を担当しており、自信がなく自分の力量以上のことを求められる環境の中で業務を行っていた。また日頃の活動の中で、虐待など深刻な健康課題を持つ事例を受け持ち、支援の難しさに直面しながらも解決に向け努力していた。職場には相談しやすい環境や教育的なかかわりを期待していた。

**キーワード** 1年目保健師、学士課程、困難、対処方法

### 研究の背景と目的

当大学医学部看護学科では例年10人前後の卒業生が保健師として北海道各地の自治体に就業している(図1)。自治体で採用される新卒保健師は、就職当初から求められる能力が幅広く、看護学基礎教育で専門職としての知識や技術が習得されているとみなされ、その実践力を求められる傾向<sup>1)</sup>にある。さらに、一つの自治体に新任保健師が1名など、少人数の採用のためにできないのは自分だけと不安が大きく、自己の能力の未熟さが認知されているといわれている<sup>2)</sup>。また、近年看護系大学が急増し、学士課程における統合カリキュラムで保健師教育を行う問題点として、十分な時間の確保が困難であることから、「大学教育では卒業時必要な保健師の実践能力が不十分」との指摘<sup>3)</sup>

や、「概念や事業までは理解できるが、そのための技術を実習で磨くことはできない」などいくつか示されている<sup>4)</sup>。

北海道は保健師の就業先が広域であり、各地に点在することから、さまざまな不安を持ち、孤立しやすいなど独自の課題があると考えられる。

このような新任保健師を取り巻く現状の中、卒業する学生が安心して就職できるよう、平成18年度から、当大学を卒業した新任保健師数人を講師に卒業セミナーを企画してきた。セミナー終了後、講師を務めた新任保健師に感想を聞いたところ、「今の自分に何が話せるか不安だった」、「準備をするうちに1年を振り返る機会となり自分の成長を感じた」、「普段ベテランの先輩の中で働いていると不安やプレッシャーがあるが、全く別の場所で話しができてよい息抜きになった」

\*旭川医科大学医学部 看護学講座

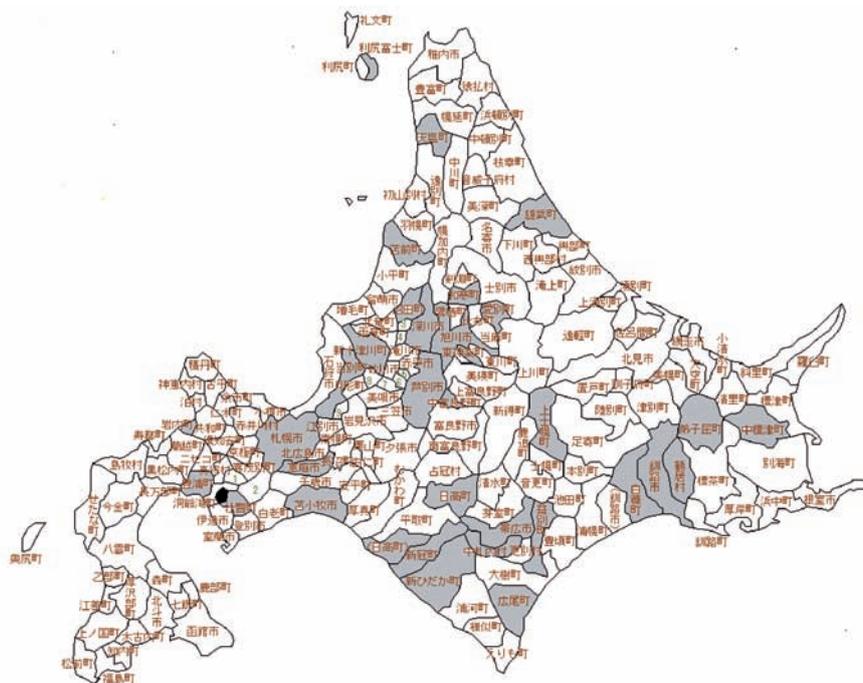


図1 保健師として就職した自治体の分布 平成 18-22 年度

等、前向きな発言が多くみられた。卒業セミナーでの講師としての準備が新任保健師の自信回復により影響を及ぼしていることがわかった。そこで、同じ1年目の保健師同士が悩みを話し、仲間と情報交換や交流することでも自己肯定感が高まったと推測され、当大学を卒業した1年目保健師を対象に、交流会を企画するに至った。この交流会に参加した新任保健師を対象に、1年目の保健師の取り組んでいる活動内容、仕事上感じる難しさ、困難への対処方法、仕事の楽しさの実態を明らかにし、新任者が安心して成長するために必要な支援について考えることを目的とする。

## 方法

### 1. 対象

本学を卒業して北海道内の自治体に就業している1年目保健師6名。平成21年3月に卒業し、北海道内の自治体に保健師として就業した者10名に文書で1年目保健師交流会の案内および調査協力の主旨と方法を説明し郵送した。その結果、6名から参加の意思があった。

### 2. 方法

研究方法は、質的帰納的研究とした。

#### 1) データの収集

データ収集はグループインタビューを用いた。グ

ープインタビューは、明らかにしたいテーマに関係する人々のグループダイナミクスを用いて質的に情報把握し体系的に情報を整理する方法<sup>5)</sup>のひとつである。1年目の自治体の保健師として仕事をしているという共通体験を語り合うことで、テーマの背景に潜む潜在的、顕在的な情報など個別のインタビューよりも豊富なデータを得られると考えた。

#### 2) 進め方

日時は、平成22年3月19日14時47分から17時10分の合計143分であった。参加者6人を一つのグループとし、当大学で実施した。グループインタビューの進行は主研究者が行い、もう一人の研究者が観察者となってようすを記録した。席の配置は図2のとおりである。テーマを、就職してからの1年間を振り返り、主に実施した業務、仕事上困難に感じる事、対処方法、楽しいと感じることとし、参加者が率直に思

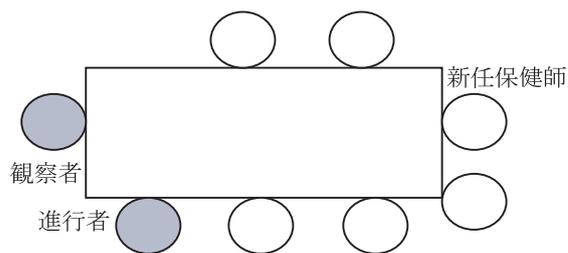


図2 グループインタビューの設定場面

いや考えを述べることができるよう配慮し、自由に話し合ってもらった。このグループインタビューは、交流も兼ねているため、席を自由とし、飲み物、お菓子を取りながらのリラックスした雰囲気を心がけた。

### 3) 実施内容の記録

話し合われた内容を参加者の許可を得て、ICレコーダーに録音した。また、インタビューの流れ、ようす、話し合われた内容など詳細に記録した。

### 3. 分析方法

録音された内容から逐語録を作成した。その中から、主に実施した業務、仕事上困難に感じること、対処方法、楽しいとすることが語られたデータを抽出した。抽出したデータから文脈の内容を読み取りコード化し、コードの意味内容が類似したものをまとめ、その分類が表す内容をサブカテゴリーとした。次にサブカテゴリーを意味内容に従って統合し、その分類が表す内容をカテゴリーとした。各カテゴリーが内容を的確に示すよう、逐語録およびメモを確認しながらこの作業を行った。分析は複数の研究者で行い、データの信頼性と妥当性の確保に努めた。

### 4. 倫理的配慮

対象者には目的、方法、匿名性の確保、協力は任意であること、インタビュー内容を録音することについて口頭で説明し、承諾を得た。

## 結 果

63のサブカテゴリー、17のカテゴリーが見出された。サブカテゴリーを<>、カテゴリーを【】で示す(表1)。

#### 1. 参加者の背景

参加者は、道内の自治体で就職している1年目の保健師6名で、全員女性であった。自治体の大きさは、人口190万人1か所、17万人1か所、5千~1万人が3か所、3千人が1か所であった。地域は、道南を除きほぼ北海道全域だった。ほとんどが各自治体1人の新人採用だった。

#### 2. 主に実施している事業

【母子保健活動】【成人保健活動】【連携調整】【家庭訪問】のカテゴリーが見出された。【母子保健活動】では、<母子健康手帳の交付など妊婦への保健事業>や<乳幼児訪問・健診など乳幼児への保健事業>で基本的な事業を実施するとともに、<ハイリスク事例の

継続支援>や<DVや虐待のある困難事例の支援>も行っていた。【成人保健活動】では、<特定健診・特定保健指導、健康教室>、<検診事後を効果的に進める工夫>で、健診を中心とした事業が主であった。【連携調整】では、<低体重児連携のシステムをつくる><情報ネットワークシステムの構築>等システム作りに関わっていたのと、<児童相談所との連携><助産師との連携><福祉、保護課との連携>が語られ、他職種や多分野の人々との連携も実施していた。【家庭訪問】では、<ハイリスクへの単独訪問><ハイリスク事例への福祉の人との同行訪問><特定保健指導のための家庭訪問>を実施していた。

### 3. 仕事に対して感じている気持ち

【個別の支援が難しい】【事業企画が難しい】【業務への自信のなさ】【力量以上を期待され負担】【自分の考える保健師活動とのギャップ】のカテゴリーが見出された。1年目ではあるが困難事例を担当しており、<正常な発達事例の支援が苦手である><長期的展望をもちながらの援助が出来ない><受け持ち事例への的確なアセスメントが難しい>と【個別の支援が難しい】と感じていた。<保健事業に関する人的資源の確保が難しい><改善すべき点はわかるがどのようにしてよいかわからない>と、【事業企画が難しい】と感じていた。<先輩だったらもっといい支援ができるのではという思いがある><看護技術の未熟さに不安がある><子育てや経験の少なさから自信が持てない><1年目で身に付けたものが積み上がっていかない不安がある>など【業務への自信のなさ】がみられた。<1年目でも任される業務が多いと感じる><訪問の件数が多い時は負担を感じる><訪問の優先度を考慮したスケジュールの調整が大変である><突発的に業務を任されること><大学で習っていないことに意見を求められる>と、【力量以上を期待され負担】を感じていた。<住民のための保健師活動なのか疑問がある><保健師の働く地区のイメージが都会と田舎では違った><自分の考え・アイデアを発言する機会が少ない>など、働いてみて【自分の考える保健師活動とのギャップ】を感じていた。

### 4. 職場環境に抱いている気持ち

【受け入れられていると感じる】と【職場環境における教育体制に対するとまどい】のカテゴリーが見出された。<相談しやすい環境である><訪問前の励ま

表1 学士課程を卒業し自治体に就業した保健師1年目の実態

	カテゴリー	サブカテゴリー
実践している主な事業	母子保健活動	母子健康手帳交付など妊婦への保健事業 乳幼児訪問・健診など乳幼児への保健事業 ハイリスク事例の継続支援 DVや虐待のある困難事例の支援
	成人保健活動	特定健診・特定保健指導、健康教室 健診事後を効果的に進める工夫
	連携調整	低体重児連携のシステムをつくる 情報ネットワークシステムの構築 児童相談所との連携 助産師との連携 福祉・保護担当係との連携
	家庭訪問	ハイリスクへの単独訪問 ハイリスク事例への福祉の人との同行訪問 特定保健指導のための家庭訪問
仕事に対して感じている気持ち	個別の支援が難しい	虐待事例の支援が難しい 正常な発達事例の支援が苦手である ハイリスクへの支援の難しさを感じる 長期的展望をもちながらの援助ができない 受け持ち事例への的確なアセスメントが難しい
	事業企画が難しい	保健事業に関する人的資源の確保が難しい 改善すべき点はわかるがどのようにしてよいかわからない
	業務への自信のなさ	先輩だったらもっといい支援ができるのではという思いがある 看護技術の未熟さに不安がある 子育てや経験の少なさから自信がもてない 1年目で身につけたものが積み上がっていかない不安がある
	力量以上を期待され負担	1年目でも任される業務が多いと感じる 訪問の件数が多い時は負担を感じる 訪問の優先度を考慮したスケジュールの調整が大変である 突発的に業務を任されること 大学で習っていないことに意見を求められる
	自分の考える保健師活動とのギャップ	なりたかった保健師像とのギャップがある 保健師の働く地区のイメージが都会と田舎では違った 自分の考え・アイデアを発言する機会が少ない 住民のための保健師活動なのか疑問がある
	職場環境に抱いている気持ち	相談しやすい環境である 訪問前の励ましと聞く姿勢がある なるべく困難事例の少ない地域を担当させてもらっている ハイリスクの事例には同行訪問してもらっている 先輩や他職種から具体的助言を得られる
仕事で困った時の対処方法	職場内で先輩や上司に相談する	プリセプターに助言をもらう 訪問記録をみてもらう 訪問報告会で助言をもらう 事例検討会のお願いをする 迅速に報告するようにする 相談しづらい雰囲気の際は回覧する 付箋に悩みを書くなど工夫する 上司へ相談する
	職場外に相談する	保健所に相談する
	自己研鑽	勉強会へ参加する 管内保健師の集まりに参加する
仕事で感じる楽しさ	住民とのかかわり	保健師になりたくなったので楽しい ハイリスクではない人の訪問はうれしい
	保健師の技術や役割がみえた	家庭訪問の意味づけの理解ができた 母子保健活動の大切さがわかった いろいろな事例をみているということが強みであることに気づいた 保健師の役割がみえてきた
	めざす保健師像がある	エビデンスに基づいた活動を行う保健師になりたい

しと聞く姿勢がある><なるべく困難事例の少ない地域を担当させてもらっている><ハイリスクの事例には同行訪問をしてもらっている><先輩や他職種から具体的助言を得られる>ことから、職場に受け入れられていると感じていた。その一方で、<自信のない自分を上司に理解してもらえない><1年目保健師のサポート環境が整っていないと感じる><事業を展開するうえでの悩みをどこに相談したらよいかわからない><他機関との交渉や調整をするときの役割についてわからない>などとまどいがみられた。

## 5. 仕事で困った時の対処方法

【職場内で先輩や上司に相談する】【職場外に相談する】【自己研鑽】の категорияが見出された。職場内では<プリセプターに助言をもらう><訪問記録をみてもらう><訪問報告会で助言をもらう><事例検討会のお願いをする><迅速に報告するようにする><相談しづらい雰囲気の際は回覧する><符箋に悩みを書くなど工夫する><上司に報告する>など個別の事例の対応への助言を求めることが多く、その方法について工夫、努力をしていた。職場外では<保健所に相談する>だった。自己研鑽では、<勉強会へ参加する><管内保健師の集まりに参加する>だった。

## 6. 仕事で感じる楽しさ

【住民とのかかわり】【保健師の技術や役割がみえた】【めざす保健師像がある】の категорияが見出された。<保健師になりたいくてなったので楽しい><ハイリスクでない人の訪問はうれしい>と、住民とのかかわりから楽しさを感じていた。<家庭訪問の意味づけの理解ができた><母子保健活動の大切さがわかった><いろいろな事例をみていることが強みであることに気づいた><保健師の役割がみえてきた>とあり、保健師として働き始め1年経過し、保健師の技術や役割がみえることで、魅力や楽しさを感じていた。また、<エビデンスに基づいた活動を行う保健師になりたい>と思っており目指す保健師像への成長への意欲が語られた。

## 考 察

### 1. 1年目保健師の直面する課題と対処方法

1年目の保健師は、【母子保健活動】および【成人保健活動】など【家庭訪問】を中心に基本的な業務を行っていた。同時に、ハイリスクや虐待などの深刻な

健康課題をもつ支援が困難な事例を受け持ち、1年目保健師自身が支援の難しさに直面していることがわかった。また、個別支援にとどまらず、【連携調整】として、低体重児の支援システムづくりにも関わり、助産師や福祉分野の職員との連携も実践していた。それらの体験の中、仕事に対する気持ちとして、【個別の支援が難しい】【事業企画の難しい】と、難しさを訴え、【業務への自信のなさ】を感じていた。新任保健師が、個別援助において困難さを感じる場合には、相談の際の知識不足が多く、特に相談場面では、一人の判断を迫られることから抱える悩みとして大きいとされ、地区活動としての事業計画についても具体的な手順や方法についての戸惑いがある<sup>6)</sup>としている。3年間の経験のある新任保健師の調査<sup>7)</sup>では、経験したことがあるケースへの対応は、問題解決に至ることが出来るが、これまでにはない援助方法を求められると対処方法が導き出せず困惑しているという現状である。1年目の保健師が会える事例は、ほとんどが初めての体験であり、今回、支援が難しいと感じるのは当然の結果でもあり、今後の成長に向けては、一事例一事例を大切に、経験から学ぶことであると考えている。

また、1年目の保健師は、自信が無いという思いを抱えつつ実際は難しい事例や事業企画に取り組んでおり、自分の【力量以上を期待され負担】と感じながら業務を行っていた。対処方法として、【職場内で先輩や上司に相談する】などして努力していた。特に事例について、<訪問記録をみてもらう>、<事例検討会をお願いする>などして、課題解決への方法の助言を期待していた。<相談しづらい雰囲気の際は回覧>、<付箋に悩みを書くなど工夫する>など、周囲に伝えて行く努力や工夫を行っていた。このようなことから、1年目保健師は、まず、職場内の関係の中での解決を試みていることが多く、職場には相談しやすい環境や教育的なかかわりを期待しているといえる。職場環境に抱えている気持ちのなかで【受け入れられていると感じる】ことには、<相談しやすい環境であること>や、<訪問前の励ましと聞く姿勢がある>であり、自信のない1年目保健師にとって、具体的な助言やあたたかな励ましが必要であると考えている。しかし、受け入れられていると感じる一方で、<自信のない自分を上司に理解してもらえない>、<1年目保健師のサポート環境が整っていないと感じる>としており、職場の教

育体制へのとまどいがある現状であった。職場外で解決する方法では、〈保健所に相談する〉という声が多く、保健所による支援の重要性が示唆された。そして【自己研鑽】として〈勉強会に参加する〉など、基礎教育では不足な知識・技術を補っていた。新任者の成長課題<sup>8)</sup>として表現力、学ぶ力、対人関係構築スキル等が指摘されている。自信のない新任保健師がどこまで成長したのかを見極め、成長に寄り添った指導が求められると考える。成長を見極めるためにも、話しやすい職場の体制、密なコミュニケーションが求められる。

また、1年目の保健師は、現場と【自分の考える保健師活動とのギャップ】を感じていることもわかった。難関である自治体の就職試験を通り、住民のために働く保健師や自分のやりたいことなど理想を掲げながら仕事に臨んでいる1年目保健師にとって、実際の現場でその思いが達成できないことにジレンマを感じていると考える。現場が多忙で本当に住民のための支援になっているのかという批判的思考をもっていた。学士課程における看護系養成の特徴として、専門的知識・技術の教育に留まらず、批判的思考力や創造性の涵養が求められている<sup>9)</sup>。今回の結果は自己のことで精一杯になりながらも活動の本質に目を向け冷静に判断する側面を持ち合わせていると考える。そのほかにギャップを感じる理由として、当大学学士課程における講義や実習では、リアルな現場を知ることは難しく、就職して新たにわかることも多くある。想像していたより事務作業が多いなど理想とは違う現実への戸惑いもあると思われる。希望していた保健師の仕事に就いて嬉しい反面、ギャップをどのように乗り越えて成長していくかも1年目保健師の直面する課題といえる。

## 2. 1年目保健師のモチベーションの向上

1年目保健師のモチベーション向上には、仕事で感じる楽しさが重要である。1年間を振り返って語る経験の中には、困難なことや自信のなさのみではなく、仕事の楽しさ、魅力を大いに感じていることもわかった。3～5か月目の新任保健師の調査<sup>10)</sup>においては、感謝される対人活動の経験は楽しいと感じていた。今回の調査でも、仕事で感じる楽しさの理由として、〈住民とのかかわり〉や〈保健師の技術や役割がみえた〉ことであった。めざす保健師像があり、〈エビデンスに基づいた活動を行う保健師になりたい〉と望

み、支援を通して、保健師の役割を理解し、根拠のある支援ができた実感するとき、やる気につながると思われる。指導保健師のいる新任保健師のほうが仕事にやりがいを感じ今後も働いていきたいと認識している<sup>11)</sup>といわれており、よって、1年目には深刻な健康課題を持つ難しい事例であっても、事例検討等で職場の上司やプリセプターによる丁寧な看護過程へのサポートがあることで、成長を促しその積み重ねが自信につながっていくと考える。

## 3. 今後に向けて

現行の学士課程のカリキュラムにおいて、保健師希望者に対する学習や実習は十分行われているとは言い難い。今回得られた1年目保健師の直面する課題から、職場に適応できる強さを育み、実践力向上に焦点をあてたカリキュラムの検討および卒業後の支援の必要性が示唆された。当大学には、広域な北海道の遠隔地で働く保健師の集まる機会や、地域での学習を支えていくための蔵書、文献へのアクセスのしやすさ等図書館の充実などのサポート体制も求められているといえる。

## 研究の限界と今後の展望

本調査では、当大学学士課程を卒業した1年目の保健師の意見である。当大学の出身者のみの限られた対象者による1回のインタビュー結果であり、一般化には至らない。またインタビュアーが当大学の教員でありかつて教員と学生という関係上、結果のバイアスになったことは否定できない。今後は、対象数を増やしデータを蓄積すること、新任保健師として1年目のみに焦点を絞るのではなく、今回明らかになった直面している課題をどのように解決し成長していったのか経年的にみて、看護学基礎教育における教育内容や方法、さらに卒業後の保健師の支援方法を探る手がかりを考えていきたい。

## 謝 辞

本研究にご協力いただいた卒業生の皆様に心から感謝申し上げます。

## 引用文献

- 1) 佐伯和子他：地域保健分野における保健師育成のOJTに対する指導者の意識と組織体制—新任者教育

- の実践を通して 日本公衆衛生雑誌 第 56 号第 4 号 242-250 2009 年 4 月
- 2) 四方雅代ほか：自治体に働く新卒保健師の職務に必要な自己の能力についての認知と職場内教育に対する要望 北陸公衆衛生雑誌 第 29 号第 2 号 58-63 2003 年 3 月
- 3) 厚生労働省：看護基礎教育の充実に関する検討会報告書 2007 年 4 月
- 4) 村嶋幸代：保健師ライセンスの現状と課題」からの科学増刊 これからの保健師 日本評論社 38-43 2006 年 9 月
- 5) 安梅勅江：グループインタビュー法—科学的根拠に基づく質的研究法の展開 医歯薬出版株式会社 2001 年 10 月
- 6) 頭川典子ほか：学士課程卒業後の保健師が新任期に感じる困難と対処状況 長野県看護大学紀要 vol.5, 31-40 2003
- 7) 池西悦子他：新任期保健師の問題解決能力の自己評価からみた現任教育についての一考察 岐阜県立看護大学機能看護学講座 教育と研究第 2 巻第 1 号 123-128 2004 03
- 8) 公衆衛生協会：指導者育成プログラムの作成に関する検討会報告書」2007 年 3 月
- 9) 文部科学省：大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会最終報告 2011 年 3 月
- 10) 大倉美佳他：行政機関で働く経験年数 1 ~ 2 年目の保健師がもつ保健師像と仕事の受け止め北陸公衛誌第 32 巻第 1 号 31-37 2005
- 11) 望月宗一郎他：新任保健師への現任教育に対する市町村保健師の認識 Yamanashi Nursing Journal Vol.5 No.2 19-24 2007

## Situations Identified through Dialogues with First Year Newly Graduated Public Health Nurses

FUJII Tomoko\*, SUGIYAMA Sachiyo\*, KITAMURA Kumiko\*

---

### Summary

The objective of this paper is to describe the situations faced by first year public nurses, employed by Hokkaido Municipalities after completion of Asahikawa Medical University's undergraduate program, by focusing on the type of activities they have been engaged in, occupational difficulties they have and their coping methods. We employed a qualitative inductive method for the study design, and conducted a group interview with six subjects, which yielded 17 categories and 63 subcategories.

Tasks they are engaged in are "maternal and children's health programs", "adult health programs," "liaison to other programs", "home visits", and the main concerns they felt about their occupation are "the difficulty of providing assistance on an individual basis", "the difficulty of planning projects", "the inability to do one's duties with confidence", "feeling pressure of expectation beyond one's ability", "the gap between one's image of public health nurses' activities and reality". Regarding the feeling they have about their working environment, two categories "I feel I am accepted." and "I worry about the educational system in the working environment" were found. Categories related to what to do when trouble arises in their work are "to consult with seniors or bosses on the job", "to consult with seniors or bosses when not on the job", and those they feel job satisfaction are "involvement with people in the community", "having understood the skills and roles of public health nurses", and "having found a model public health nurse".

First year public health nurses were in charge of adult health programs as well as maternal and children's health programs, and conducting their duties in an environment where they were required to perform beyond their abilities without confidence. Further, they were striving to solve problems for which it was difficult to provide support, although they were in charge of cases with serious health problems such as abuse in their daily activities. It was suggested that they expected their workplace to create an educational environment that would make it easier to consult with their seniors or bosses.

**Key words** first year public health nurses, undergraduate program, difficulty, coping method

---

\* Asahikawa Medical University, Department of Nursing